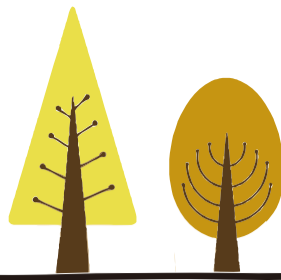


【9・10・11月の主催行事】 秋のイベント情報



牛久自然観察の森
季刊情報誌



森のしんぶん

秋号 No268

集まれ昆虫大好きっ子！！

マジックアワーミュージアム 9/3(土)

照明を落とした
水槽コーナーも
「そっ」と見てみよう！

夕闇のせまる森は、生きもの達の博物館。ヒグラシの大合唱やバッタの産卵、コオロギ・クツワムシの求愛など夕暮れ時にみせる生きもの達の神秘的な生態に会おう。



開催時間：午後5時30分～6時30分
対象：小学生とその保護者
定員：8組
参加費：大人1名1000円、こども1名500円
集合場所：第1駐車場に隣接する梅林
申込：電話で事前申し込み
備考：雨天、強風時は中止。
中止の際は当日午後3時までにご連絡いたします。

スズムシ飼育講座 9/4(日)

スズムシの飼育セットを作って、音を出す様子や産卵シーンなど生態をじっくり観察してみよう。

時間：午前9時～10時
集合場所：ネイチャーセンターレクチャー室
対象：小学生とその保護者
定員：5組
参加費：1セット1000円
(飼育用の土、止まり木、エサ入れ、スズムシ♀3匹ずつ)



申込：8月16日(火)から電話で事前申し込み
備考：飼育ケースはご用意下さい。

こども昆虫教室

雑木林や原っぱに生息している昆虫を、季節ごとにわかりやすくご紹介するガイドツアー

9/10(土) 「鳴く虫探検隊♪」
10/8(土) 「赤とんぼの見分け方を覚えよう！」
11/12(土) 「カマキリやバッタの生態観察！」



開催時間：午前9時～10時
対象：小学生とその保護者
定員：8組
参加費：300円(小学生1人につき)
※保護者、幼児以下は無料
集合場所：ネイチャーセンター前
備考：雨天、強風時は中止。中止の際は当日午前8時までにご連絡いたします。
申し込み：9月：9月1日(木)から電話にて事前申し込み
10月：10月1日(土)から電話にて事前申し込み
11月：11月1日(火)から電話にて事前申し込み

幼児昆虫教室 11/3(祝)

原っぱで大きくなったバッタやカマキリと一緒に探してみよう！

時間：午前9時～9時45分
集合場所：ネイチャーセンター前
対象：幼児とその保護者
(3歳から6歳の未就学児とその保護者)
定員：10組
参加費：子ども1人300円(保護者の方は無料)
申込：10月15日(土)から電話で事前申し込み
備考：雨天、強風時は中止。(中止の際は当日の午前8時までにご連絡いたします。)



こども・親子向け

森でランチ

～季節のいきもの植物の紹介と絵本の読み聞かせ会～

9/9(金)「バッタとこんにちわ」
10/14(金)「どんぐりどんぐり」
11/11(金)「落ち葉でじゃんけん」



開催時間：正午～午後1時
対象：幼児とその保護者
参加費：無料
集合場所：バッタの原
持ち物：お弁当、水筒
備考：雨天決行(雨天時はネイチャーセンター内1階薪ストーブ前)
申し込み：予約不要、当日受け付け

しぜんっこくらぶ

9/15(木)「はじめてのバッタとり」
10/20(木)「どんぐりみつけよう」
11/17(木)「いろんな色いろんなはっぱ」

2歳～3歳児の幼児とその保護者向けの自然体験講座です。秋の森で生きものとふれあったり、クラフト作りをして楽しみましょう。

開催時間：午前10時～11時30分
集合場所：第一駐車場横、道路向いの林の広場
対象：2～3歳児とその保護者 定員：8組
参加費：各回1000円(クラフト材料代など)
備考：主に野外での活動。雨天、強風時は中止となります。
中止の際は、当日の午前9時までにご連絡いたします。
申し込み：9月1日(木)午前9時から電話またはネイチャーセンター受付カウンターで受け付け。

赤ちゃん向け

赤ちゃん木育ひろば

11/7(日) 休園日特別開催

木のおもちゃのレクチャーと笑顔の「親子記念撮影会」。初めての木育ひろばをみんなで楽しみましょう！



開催時間：午前10時～11時
対象：6カ月以上～1歳未満の赤ちゃんとその保護者
定員：8組
参加費：大人1人につき300円
集合場所：木育ひろば「うっしっし」
申込：10月15日(土)から電話で事前申し込み

大人向け

園長の里山ガイドツアー 9/11(日) 10/9(日) 11/13(日)



植物を中心とした園内のネイチャーガイドツアー。結実した実や冬越しの準備を始める植物たちを観察していきます。
時間：午後1時～3時
対象：成人向け
参加費：無料(予約不要)
集合場所：ネイチャーセンター前
備考：雨天時、強風時は中止となります。中止の際は、開催1時間前に牛久自然観察の森のHP「観察の森最新情報」内に記載いたします。

団体向け

ネイチャーガイド

牛久自然観察の森では、自然解説員が団体の方向けにガイドを実施しております。主なガイドテーマは

- ① 「自然観察全般」
- ② 「季節の植物観察」
- ③ 「バードウォッチング」
- ④ 「昆虫ウォッチング」



これまでも、昆虫の採集方法やトラップの作成方法、これからバードウォッチングを始める方への双眼鏡の使用方法や野鳥の生態解説、森林整備を行っているボランティア団体の方々へ里山保全活動についてご案内をさせていただきました。

左記のテーマを元に、ご希望の内容がございましたら遠慮なくご相談ください。

料金
1時間 3,240円(税込)
※ガイド1名につき35名まで対応
申し込み
電話又はネイチャーセンター受付カウンターにて事前申し込み



定例バードウォッチング 9/18(日) 10/16(日) 11/20(日)

開催時間：午前9時～11時
集合場所：ネイチャーセンター前
対象：一般
申し込み：不要、当日受付
参加費：無料
持ち物：双眼鏡
備考：双眼鏡の無料貸出有り。雨天、強風時は中止。
中止の際は当日の朝8時までにHPに掲載いたします。

ボランティア募集

園内の植生管理作業 毎週水曜日

毎週水曜日は森の保全活動日。下草刈りや落ち葉集めを中心にフクロウをはじめとした生きものを育む森林作業を行っています。爽やかな秋空のもと、爽やかな汗を一緒にかきませんか？
開催時間：午前9時～11時30分
対象：一般
申し込み：事前登録制(お電話、または受付カウンターで受付)



イベント情報は公式HPでもご覧いただけます。

申し込み & お問い合わせ 029-874-6600 休園日 9月：5(月)、12(月)、20(火)、21(水)、23(金)、26(月)
10月：3(月)、11(火)、12(水)、17(月)、24(月)、31(月)
11月：7(月)、14(月)、21(月)、24(木)、28(月)

開園時間 9:00～16:45 (11月～1月は16:00迄)

秋に見られる生きもの達

樹々の葉っぱが色づき、実りの季節を迎える森。冬に向かって日々変化していく森ではいったいどのような生きものが見られるのでしょうか？



シロハラ

ヒヨドリほどの大きさと、嘴が黄色く、お腹の灰色が特徴。落ち葉をひっくり返し虫を探す姿をよく目にすることができます。



カケス

ヒヨドリよりも一回り大きく、ギャーギャーと大声で鳴くので存在感がありますが、警戒心が強く、近づくとすぐに林の奥に飛んで行ってしまいます。



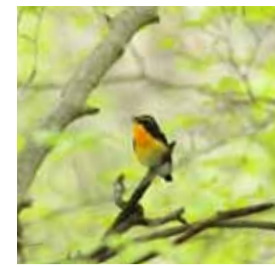
ジョウビタキ

スズメぐらいの大きさ。胸元がオレンジ色の雄は、木のでっぺんに止り、ヒーヒーと透き通るように鳴きます。



ルリビタキ

スズメほどの大きさ。成熟した雄はブルー色彩と側面の黄色い色彩が葉を落とし始めた森の中で、ひときわ目を引きまします。



キビタキ

日本の山間部から東南アジアに渡る旅鳥で、途中、園内に立ち寄る個体も。雄は背中黒と喉元の黄色が特徴的。園内ではイヌザンショウの実に集まります。



ドングリ

ブナ科の実の総称。園内では主にクヌギ、コナラ、シラカシの3種類のドングリが見られます。



カラスウリ

赤が鮮やかな実の中には、打ち出の小槌に似た種が。種を野鳥に消化されずに遠くまで運んでもらうためか、種の周りはぬめりが効いています。



カントウヨメナ

野菊の代表種。林縁や明るい林床で見られ、淡紫色の花を咲かせます。秋、園内ではノコンギクやシラヤマギク、アワコガネギクなどの野菊も花を咲かせます。



フジカンゾウ

「ひつつき虫」のひとつで、半月のような形をした実をつけます。同じマメ科のヌスビトハギという植物も似たような実をつけます。



アキアカネ

田んぼに産卵するため高原から下りてきたアキアカネ。「ビートルズトレイル」で稲穂の上をとびかう姿を目にすることができます。



トノサマバッタ

「バッタの原」や梅林で見られ、夕暮れ時に園におなかを突き刺し産卵します。



オオカマキリ

カマキリの仲間は秋に成虫になり、卵を産んでその一生を終えます。園内ではオオカマキリの他にハラビロカマキリやコカマキリが見られます。

動物調査

モニタリング野鳥調査の報告

牛久自然観察の森では、モニタリング1000里地調査を行っています。この調査は、環境省が主催する調査で全国に調査地点を設け同じ手法で定期的に長期に渡って調査を行うことで、環境の変化を把握する全国的な調査です。

調査地点には、コアサイト（18箇所）と一般サイト（180箇所）と呼ばれる地点とがあります。コアサイトとは、日本の多様な気候帯に均等に配置され、複数の調査項目を100年に渡って調査するサイトです。また新しい調査手法やデータの解析方法を導入したり改良したりするサイトにもなっています。一方、一般サイトは1つの調査項目から登録することができます。最低調査期間は5年（継続調査申請も可）と比較的参加しやすいサイトとなっているほか、全国に多数



設置されているので、全国規模で里山里山の環境の変化をとらえていく特徴をもっています。

牛久自然観察の森では一般サイトとして登録し、哺乳類、植物、野鳥調査を行っていま

す。今回はそのうちの野鳥調査についてご紹介したいと思います。

野鳥調査は、ボランティア（注1）の協力により5～6月の繁殖期と12～2月の越冬期の2シーズンに6回ずつ実施。牛久自然観察の森の植生である森林、隣接する田園地帯、小野川沿いの河川の環境に見られる野鳥の種類と数を記録しています。種類の判別には目視以外に野鳥のさえずり（繁殖期だけに鳴く特別な鳴き方）や地鳴き（その他の期間に鳴く鳴き方）でも判断します。

野鳥は、生きものの中では比較的大きく、生息していくためには、たくさんの餌や生息空間が必要になります。また、野鳥は、種類によって森林が得意だったり市街地が得意だったり、生息環境が異なります。そのため、種類を把握することで、環境が今どのような状態なのか、あるいはどのような状態になりつつあるのか、傾向をつかむ参考になります。また、同じ時期、同じルートを長期に渡って調査することでそれらの変化を把握する判断材料になる場合もあります。

牛久自然観察の森では、平成20年の越冬期から調査を開始し今年で9年目を迎えます。繁殖期、越冬期を問わず出現した種数だけを数えると64種。各年の繁殖期の種数は24種～31種、越冬期は29種～37種と多

少のばらつきはあるものの概ね横ばいで推移しているよう状況でした。また各生息環境別に出現する種類を見比べても大きな変化を読み取ることは出来ませんでした。

調査の記録をたどるとオオタカはほぼ毎年見られ、ノスリ、チュウヒ、ハイタカ、フクロウなどの猛禽類がみられる年もありました。一般に、生態系の頂点に君臨する猛禽類が生息する環境は、豊かな生態系が維持されている指標になりますが、牛久自然観察の森や調査を行った小野川周辺の環境が彼らにとって重要な生息地の一つになっているようです。

一調査地点としての状況、そして全国的な状況の変化を知る手がかりとして継続調査を引き継いでいきたいと感じています。（牛久自然観察の森 自然解説員）



上空を飛ぶオオタカ（定例バードウォッチング時に撮影）

アカデミックボイス

里山の今昔④

身近な「ヤマ」の現在～里山保全 自然観察の森～

はじめに

夏号では、社会構造の変化を踏まえ、伝統的な里山の終焉から現代的活用に至る過程を紹介した。今号においては、現代的活用の代表例として、自然観察の森について取り上げ、本連載の締めとしたい。

里山と自然観察の森

1980年代、かつての身近な自然、伝統的な里山は失われつつあり、人の手によって維持されてきた里山は原生の自然に還りつつあった。そこで、里山の新たな利用手段、レクリエーションの場としての現代的活用が模索された。自然観察の森はそのモデルケースとして整備された。そこには、人の利用による自然保護を実現させる意図があった。自然の利用と自然の保護の両立、すなわち保全という概念が、里山において積極的に用いられるようになった。

里山と植生管理

里山の姿は時代によって大きく変わる。伝統的な里山では資源利用が主体であるが、現代的活用ではそうではない。この違いは、

植生、すなわち森林の樹木に現れる。里山は植生の管理によって維持されるが、伝統的な里山であれば、植生管理には大きな作業のピーク、植生のリセット作業が存在する。下草刈りや枝打ち、落葉払いなどの日常的な管理に加え、そうやって管理してきた樹木を20～30年ごとに伐採し、新たな芽吹きを促す。伐採された材は資源として活用される。このリセットによって、伝統的な里山には鬱蒼とした深い森ではなく、常に新しい命が息づく明るい森が維持される。そのまま何十年も放置すると、森林は原生的なものへと変遷いき、その姿はかつての里山と同じものとは言えない。ただ、ありのままの自然を守ろうという意味では、そうやって原生の自然の復活を見守ることも決して間違いではない。現代の里山は、必ずしも資源利用が必要ないので、リセットを伴わない植生管理もある。

牛久自然観察の森での植生管理

実は、自然観察の森にとって、2010年代はターニングポイントであった。というのも、2010年代は、まさに前回のリセットから20～30年が経つ頃であったのだ。1960年代までは伝統的な里山利用が存在し、1980年代には自然観察の森開園前の整備として植生をリセットした。そして、2010年代はそれから20～30年が経過し、木々はかつての里山であれば、伐採に適した樹齢になっていた。そこで、牛久自然観察の森においては、一部では植生のリセットを行い、他では日常的な植生管理に留めるという方針の選択をした。かつて

の里山の姿を残す部分と、かつての里山とは違うものになるかもしれないが、自然をそのまま残していく部分とに分けたのである。

かつて存在した伝統的な里山を目指すのか、現代的な意味で、人との関わりのある自然の姿としての里山を目指すかで、里山保全のあり方は異なる。保全と言っても、前者はより人の利用を重視したもの、後者はより自然の保護を重視したものといえるだろう。牛久自然観察の森ではその両方に価値を置き、植生管理を含めた、管理計画の異なるゾーンを設けることで両立を試みている。

里山保全のこれから

里山には国内外からの強い関心が集まっており、里山保全は今後ますます必要となっていこう。しかし、自然観察の森のように、里山を保護区として管理できている事例は非常に稀だ。国立環境研究所の調査によれば、里山は日本の国土の6割を占めるとされる。現状では、利用もなく放置されているところが多い。こういったところでの、これからの里山保全をどうしていくのか。再び伐採して、伝統的な里山の姿を目指すのか、それとも、伝統的な里山利用からは、既に50年近く離されてきた自然を、新たな人と自然の関係を表す場として伐採せずに見守るのか。この2つの道のどちらを取るべきかというのは、容易に答えの出る間ではないだろう。しかし、未来へ残す自然をどうしていくのか、今後も見聞を広げ深く議論していきたい。（筑波大学大学院生命環境科学研究科 神宮翔真）